徳島市民病院だより

徳島市民病院の理念

「思いやり・信頼・安心」

〒770-0812　徳島市北常三島町２丁目34番地　徳島市民病院
Tel(088)622-5121(代表)

平成30年 16号
平成30年9月

インタビュー

三　宅　宇都宮先生、本日は外来診療終了後の本当にお疲れのところ、お時間を取っていただきありがとうございます。早速ですが、徳島市医師会長就任おめでとうございます。

宇都宮　医師会活動は長かったのですが、病院の方が忙しく会長が務まるとは思っていませんでした。年齢のこともあり、手術を減らし外来診療を中心にやっていくということで、会長をお引き受けしました。会員のための医師会であることは当然ですが、徳島市の医師会として市民病院との連携をしっかりとしていきたいと考えております。災害時の対応などもこれからの重要課題です。

三　宅　災害時には市医師会の先生方と市民病院の連携は非常に重要と思います。当院にはＤＭＡＴ隊員は15人おり、熊本地震や先日の豪雨災害時にも愛媛県大洲市に出動するなど経験を積んできています。また、彼らを中心に院内の災害訓練も行っており役に立てると思います。

宇都宮　医師会は年４回ほど災害訓練をしています。市内は橋が多いから橋が落ちたことを想定してブロックごとに市民病院とか県立中央病院などを拠点に治療体制を組む必要があります。救護所立ち上げなど具体的なシミュレーションはできているので、実際の災害時には役立つと確信しています。

三　宅　医師会の先生方と市民病院・中央病院・赤十字病院などの災害拠点病院が力を結集しなければ大災害には対処できません。これからも市医師会の災害訓練に当院の職員も参加し、連携を深めたいと思います。また、患者情報のキャッチボールをもう少し充実させてもらえるとありがたい。連携パスとかの利用も積極的に取り入れたらよいように思う。

三　宅　院内で機会あるごとに言っていますが、すいません。再度徹底していきます。パスに関しては、あまりできていないように思われますので、また確認しておきます。

宇都宮　これからは在宅患者がキーワードになります。高齢社会になり市内には認知症などの在宅患者が増えています。市民病院に頼っていくことになると思います。ぜひ助けていただきたい。

徳島市医師会長
宇都宮　正　登
1954年徳島市生まれ。1980年大阪大学医学部卒・医学博士。日本泌尿器科学会専門医・指導医。宇都宮皮膚泌尿器科院長。徳島市医師会長

市民病院長
三　宅　秀　則
1957年倉敷市生まれ。1983年徳島大学医学部卒。消化器外科専門医、日本肝胆膵外科学会高度技能指導医、肝臓学会肝臓専門医。市民病院長。徳島市医師会副会長

三　宅　医療連携の面では、豊崎前医師会長にも、連携医の先生に紹介をお願いする前に、まずは逆紹介をしっかりするようにご指摘を受け、医師全員に繰り返し周知はしております。

宇都宮　ときには紹介した患者さんの手術の内容や転帰などの情報が返ってこないとかもあり、認知症を併発している患者さんは実際当院でも増えております。地域住民の方に安心して医療を受けて頂くのが公立病院の責務と考えており、認知症に関しましても認知症サポーター医を目指している医師もおりますので、病病・病診連携を大切に情報交換を密にして、市民の医療を守っていきたいと思っております。

宇都宮　市民病院は、リウマチ・膠原病内科の新設、関節治療センター、最新のマンモグラフィー導入など魅力的な点が結構ありますが、毎年行われる市民病院地域医療連携会に出席する医師会員は30人ほどで、このような情報を知らない会員がたくさんおります。また、近年市民病院が力を入れている緩和ケアの現状などももっと知りたい。医師会員対象のセミナー等を開いて頂けるとありがたい。

三　宅　当院としても、医師会の先生方にもっと知って頂きたいです。早速前向きに検討させて頂きます。ところで、先生のお部屋には、立派な車や船などの手作りのプラモデルがたくさん飾られていますが、休日は何をされますか。私はこの職に就いてから休日も自由な時間が減り、運動をかねてたまのゴルフぐらいしかしていませんが。

宇都宮　プラモデル組み立て以外には、コンサートに行くのも好きで、年に４、５回行っていました。安室奈美恵、

◀2面に続く

脳卒中への取り組み
治療は時間との闘い

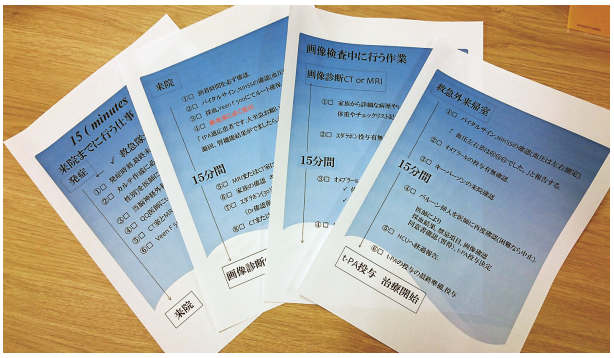
脳神経外科主任医長
木内　智也

脳卒中とは、突然脳の血管が破れたり（くも膜下出血、脳出血）、詰まったり（脳梗塞）して脳に血液が通わなくなる疾患です。今回は脳卒中のうち7割以上を占める脳梗塞について当院の取り組みを紹介します。

２００５年にｔＰＡ静注療法（血栓を溶かして血流を再開通させる強力な薬による治療）が認可されました。２０１５年２月には血管内治療、つまりステント型の血栓回収療法の有効性が米国で開催された国際脳卒中学会で初めて証明されました。以前なら寝たきりになっていたケースも、社会復帰できるという期待が持てるようになりました。ただし、良い薬剤、機器が導入されても、治療条件によっては全く転帰が異なります。

発症から4・5時間以内

その条件とは「時間」です。ｔＰＡ静注療法は発症から４・５時間以内。当然、投与するまでの時間が早ければ早いほど転帰は良くなります。「ｔＰＡ投与開始が15分短縮できると、自宅に帰れる人が１００人中８人増加し、院内死亡が４人減少する」、逆に「治療が５分遅れると、１人の有意義な人生が奪われる」と言われます。このような背景から『脳卒中治療ガイドライン２０１５』では「ｔＰＡ投与は少しでも早く（遅くとも来院１時間以内に）始めることが強く勧められる」と明記されました。



作業をマニュアル化

当院ではｔＰＡ投与短縮に向けた院内体制の構築を行っております。患者来院から薬剤投与までの関連スタッフ間の連携強化が極めて重要となります。このため、基礎知識や時間短縮の意義を十分理解する目的で、救急室やＨＣＵ、放射線科の看護師・放射線技師らを対象に、医師が繰り返し勉強会を開きました。さらに、いつでも誰でも同じように診療が行えるように作業をマニュアル化しました。来院から15分刻みのwork flow＝写真＝を細かく具体的に作成し、常に「時間」を意識して診療に当たっております。このような取り組みで、関連スタッフ全員が同じ方向を向いて協力し合う意識が生まれています。

後遺症なく社会復帰

直近の症例では、完全右麻痺、完全失語の左中大脳動脈閉塞の80歳代男性に、来院から47分でｔＰＡを投与。患者は後遺症なく、２週間で社会復帰されました。

症例を常に振り返って検討し、明日来院する患者さんへとフィードバックを繰り返すことで、スタッフのモチベーションを高く保ち、継続して脳卒中診療レベルを高める努力を行っております。

◀1面続き

桑田佳祐などジャンルは広いです。歌舞伎にも行きます。会長職に就いたので2回行けるかどうか…。

三　宅　非常にご趣味が多彩で、びっくりしました。最後に先生はどうして医師になられたのですか？

宇都宮　医者の家で育ったので自然に医者になりましたが、生まれ変われたら、物作りが好きなので工学部に行き橋を造ったりしているかもしれません。

三　宅　宇都宮先生、本日はお忙しい中、ありがとうございました。今後とも公私共々よろしくお願い申し上げます。

リレー版 研修医日記

臨床研修医2年目　関口　諒

研修が始まり１年と少し経ちましたが、非常に充実した研修生活を送っています。各科では指導医だけではなく、看護師さん、技師さんなどのコメディカルの方々にも優しく指導していただいています。指導医からは知識や技術面だけではなく、患者さんへの接し方など医師としての在り方を教えていただいています。

救急外来で診察した患者さんに、「話を聞いてもらえただけで楽になった。ありがとう」と言われたときにすごくうれしかったのを覚えています。研修の日々の中で医師としての言葉の重みの大切さと、一つ一つの行動に伴う責任感の重さを感じています。患者さんが安心できるように、相手の立場で考えることを忘れないようにしています。研修医同士も仲がよく、お互いに切磋琢磨してスキルを高めあい、楽しく研修をさせていただいています。

研修当初は分からないことばかりで不安でしたが、多方面からの温かいサポートと熱心なご指導のおかげで毎日が本当に充実しています。私も患者さんの病気を診るだけではなく、心も癒やせるような医師を目指して精進していきたいと思います。これからもよろしくお願いします。

登録医らと親睦深める

143人参加し地域医療連携会

第30回徳島市民病院地域医療連携会が7月5日、阿波観光ホテルで開かれました。県内の登録医の先生方55人、当院からは医師ら88人が出席し、懇親会などで親睦を深めました。

三宅秀則院長が「ご迷惑をおかけしていた夜間・休日の受け入れ体制は以前に比べ充実させました。緩和ケア病棟では院外からの患者も積極的に受け入れています」などと最近の当院の取り組みを報告。続いて二つの講演がありました。

4月に発足した関節治療センターの講演では、中野俊次センター長と岸潤副センター長が、整形外科、リウマチ・膠原病内科、リハビリテーション科が連携して関節の治療を行う独自の医療システムを説明しました。乳がん治療の講演では日野直樹がんセンター長が、1月に導入した3D画像が得られるマンモグラフィー装置について説明。乳がんの2D画像と3D画像を並べて投影し、判別しにくいがん組織でも正確に診断できることを示しました。

懇親会では、宇都宮正登徳島市医師会長が「市医師会と市民病院はこれまでも親密な関係を保っている。この関係をさらに深化させたい」などと挨拶。当院の新任医師、臨床研修医の紹介などもあり、参加者たちは和やかに交流しました。

こちら薬剤部（上）

当院薬剤部の25人の薬剤師は、安全で最適な薬物療法を提供するため、さまざまな医療現場で活躍しています。緩和ケア、がん薬物療法などの先端医療業務はもちろん、年間を通して薬学部学生の実務研修を受け入れるなど後継者育成にも力を入れている薬剤部を3回に分けて紹介します。

災害時の備えと活動

数十年以内の発生が確実視されている南海トラフ巨大地震や記録的豪雨などへの備えとして薬剤部の準備と対策を説明します。

1、備蓄医薬品の準備と運用

薬剤部は平成26年に院内各部署と協働で初動期と慢性期に必要とされる備蓄医薬品を選定し、浸水を心配しなくてすむ4階専用倉庫に保管しています。

2、災害時薬務コーディネーターとしての活動

平成24年3月に制定された県の災害時コーディネート制度の一つで、医療機関への医薬品供給や全国各地からの応援薬剤師の適正配置を担当します。災害時には、県の委嘱を受けた当院薬剤部のコーディネーターは災害拠点病院である当院へ薬剤師を派遣し医薬品を供給します。

近年各地で記録的豪雨による大規模洪水や土砂災害が頻発しています。災害時の医療提供は公立病院の責務と考えます。薬剤部員は災害に備え訓練などへの参加も積極的に行っています。

（文・萬玉隆男薬剤部担当次長、イラスト・伏谷秀治薬剤部長）

「あんしんカード」でのお願い

平成27年4月の「がんセンター」発足と同時に発行を開始した「あんしんカード」＝写真＝は、本年7月末現在で206枚に達しました。このカードは当院が治療したがん患者さんで、救急診療が必要となる可能性がある方に発行しています。このカードを持っている患者さんには、かかりつけ医や連携医療機関で治療中、もしくは在宅療養中であっても、救急時は当院が24時間対応できる体制を取っています。

カードは、患者さんやご家族の心の支えになると同時に、私たち医療者にとっても治療情報が共有でき、即座に診療科を超えた協力体制の構築が可能となります。当院からの紹介で「あんしんカード」を持っている患者さんが来院された場合は、いつでも当院がバックアップできることを知っていただき、治療に当たってくだされば幸いです。

（がんセンター長　日野直樹）

がん豆知識 ⑩

子宮がん

子宮は頸癌（けいがん）と体癌の2つの異なる癌が発生するまれな臓器です。頸癌はHPV感染が原因で40歳以下の若年女性の死亡率が上昇して問題になっています。これといった症状がないため検診で見つけるしかありません。

先進国ではHPVに対するワクチンが広く行われ、CIN（前癌状態～上皮内癌）の発生が既に半減しています。しかし日本では副作用の問題で全く接種されていません。将来、世界中で頸癌が激減している中で、日本だけは頸癌が多発していることになると思います。病気の罹患率がきちんと管理されている国では、HPVワクチンの副作用といわれている症状はワクチン接種歴のない少女たちにも同様に存在しており、ワクチンの接種で発生率が増加しないことが知られています。WHOも日本に対してワクチンの接種を再開するように度々アナウンスを出していますが、一向に動く気配がありません。

一方、体癌の多くはホルモンバランスの異常を背景に発生します。昔は子宮がん全体の1割でしたが、生活スタイルの欧米化によって増加し、現在は5割を超えています。95％の患者に不正性器出血があるので、出血があってから病院に行って間に合うことがほとんどです。逆に閉経後に不正性器出血がある方の3割に体癌が見つかりますので、症状がある場合は至急、婦人科を受診させてください。

（がんセンター婦人腫瘍科　古本博孝）

華やかに病院まつり開く
過去最多の900人参加

「来て！見て！やってみよう！」をテーマにした「第9回市民病院まつり」が7月21日、開かれました。昨年より三つ多い29種のイベントを展開、過去最多の約900人がさまざまな催しを楽しみました。

健康チェックコーナーでは、頸動脈エコー検査で最大約1時間の順番待ちとなり、昨年人気を集めた「こどもお薬教室」は、今年も50人の定員が30分であふれ、8人を追加しました。親子を対象にした「がん啓発クイズラリー」も約1時間で定員80組に達するなど、参加型イベントの根強い人気ぶりを見せつけました。

地下研修ホールでは「大人も子供もやってみよう！心臓マッサージとAED」が開かれ、2回合わせて約60人の親子連れが命の大切さを学びました。1階ホールの特設ステージでは、二胡コンサート、弦楽四重奏コンサート、皆谷尚美コンサートが次々と開かれ来場者らを楽しませました。

例年人気のバザーは、今回も開始10分前から長い列ができていました。子供たちに人気のキャラクター「トクシィ」「かわに～ズ」「すだちくん」「よ坊さん」が勢揃いした阿波踊り教室では、「トクシィ」の指導で子供たちが楽しそうに踊っていました。

バルーンアートで健康増進

病院まつりの日、来場者を最初に出迎えたのは玄関に飾られた恐竜ティラノサウルス。全て風船で作られていますが、今にも走り出しそうな雰囲気が漂っていました。作ったのは当院バルーンアートクラブ（部長・三原美子看護師長）で講師を務める松永郁子看護師＝写真＝です。

平成25年から活動を始めた同クラブは、現在会員数25人で毎月第2火曜日に3階会議室で制作活動を行っています。病院まつりでは作品展示のほか、バルーンアート体験教室で会員が親子連れらに花や昆虫の作り方を指導し、人気イベントの一つになっています。

院外活動として、がん征圧を目指すチャリティ活動の「リレーフォーライフ」に参加し、東新町でバルーンアートの配布などをしています。県看護協会が開く「まちの保健室」では、大型量販店などでバルーンのプレゼントや制作教室を開き、健康増進のお手伝いをしています。

雨の中、今年も阿波踊り
院長ら市内演舞場で乱舞

当院の阿波踊り連「眉誠連」（連長・竹内誠整形外科医長）は8月15日、徳島市内の演舞場2カ所に踊り込みました。医師や看護師らとその家族68人は、1階ロビーで入院患者さんらを前に踊った後、元町演舞場と新町演舞場で観光客らに乱舞を披露しました。

降りしきる雨、遠くでは雷鳴。最悪のコンディションにも負けず、竹内連長を先頭に全身びしょ濡れの三宅秀則院長ら踊り子たちは、病院職員14人で結成した鳴り物に合わせ、華麗に演舞場の主役を演じました。両親に連れられて3年連続で参加した住友隆幸ちゃん（5歳）は「街に人が多いのが楽しい。来年も絶対踊る」とすっかり阿波踊りのとりこになったようでした。

豪雨被害の大洲にDMAT派遣

7月8日早朝、徳島県から当院に西日本豪雨災害に対するDMAT派遣要請がありました。当院は、三宅秀則院長指揮の下、井野口卓内科主任医長を隊長に、谷崎宏美看護師長、斉藤辰彦薬剤師、谷川仁美副看護師長の4人を愛媛県西部へ派遣しました。

現地活動班は同日13時33分、当院を出発、愛媛県立中央病院内の調整本部の指示で、大洲市内の避難所アセスメントを担当しました。前日までの豪雨で水量が増加した上にダムの放流により氾濫した肱川は、橋を流し、山の中腹の民家2階まで浸水させるほどでした。

避難所の一つである肱川公民館では、泥だらけの廊下を歩いていくと、数人の高齢者が避難していて、それ以外の避難者は、自宅の片付けのために昼間はいませんでした。断水と停電の中、近所のスーパーのかろうじて無事だった食料で食事をし、ペットボトルの水でトイレを流している状況でした。私たち現地班は10日14時、活動を終え帰着しましたが、現場は悲惨な状況でまだまだ支援が必要です。（谷川仁美）

編集：徳島市民病院　広報管理室　TEL（088）622-5121（内線 2333・2103）　印刷：星印刷株式会社　〒770-0936 徳島市中央通2丁目19番地　TEL（088）652-7508